

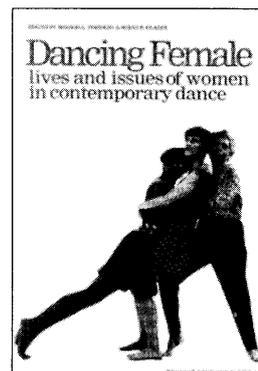
〈書評〉

Sharon E. FRIEDLER and Susan B. GLAZER (eds.),

*Dancing Female :
Lives and Issues of Women in Contemporary Dance*

(xvii+318頁 Harwood Academic 1997 ISBN: 90-5702-026-2 \$39.95)

酒向 治子



1. 本書刊行の背景

本書 (Sharon E. Friedler and Susan B. Glazer eds. *Dancing Female : Lives and Issues of Women in Contemporary Dance*, Amsterdam: Harwood Academic, 1997) は、劇場ダンス¹に関わる女性の生き方に焦点を絞り、女性がダンス界で担ってきた役割や、キャリアを追求する中で直面する問題の多面的な分析に挑んでいる。従来のダンスとジェンダー研究に欠けていた実践的な女性のダンス活動の内実に迫る意欲的な試みであり、新たな研究の方向性を提示する注目すべき書である。

編者 F.E. フリードラー (Sharon E. Friedler) と G.B. グレーザー (Susan B. Glazer) はそれぞれ米国のスワスモア大学の音楽・ダンス学科、芸術大学 (the University of the Arts) のダンス学科に籍を置くダンス理論を専門とする舞踊研究者である。彼らがプロフェッショナルな環境における女性の生き方や、通時的・共時的観点から女性同士のコミュニケーションを包括的に捉えた研究に着手したのは1989年である。女性が優勢を占める芸術分野であるにも関わらず、ダンス界における女性の生き方に着目した研究は当時皆無に等しい状況であった。彼らはこの研究を開始したきっかけについて本の中で触れており、1989年6月米国フィラデルフィアで開催された「ダンスにおける女性の未来像」を主題とする ADF (American Dance Guild) 会議であったと述べている。²

1980年代、フェミニズム研究の興隆を背景に、作品を通じて新たな女性像を追究する P. バウシュ、B. カミングス、B. ミラーなどの女性振付家が率いるダンスグループが次々にコンテンポラリーダンス界に登場した。創作現場での表現活動の後を追うように、欧米でダンスとジェンダーの研究が活発になったのは1980年代半ばのことである。80年代末から90年代初めにかけて、*Dance Research* や *Dance Resesarch Journal* 等主要なダンス/パフォーミング・アーツの学術誌はこぞって「ダンスとジェンダー」の特集を組み、CORD (Congress on Research in Dance)・SDHS (Society of Dance History Scholars) 等のダンス国際学会も同様のテーマを会議の主題に取り上げた。1989年の ADF 会議が「ダンスにおける女性の未来像」を主題にしたのも、ダンス界全体におけるフェミニズムへの関心の高さを反映してのことである。90年代から現在に至るまでジェンダーとダンスに関する研究書が相次いで出版されたが、C. アデアの *Women and Dance* (1992) など、その多くがジェンダーの視点による舞踊史の読み直しを中心テーマに据えたものである。本書は、舞踊史に片寄らず劇場ダンスと女性の問題に関わる多彩なパースペクティヴを提示し、ダンスとジェンダー研究の土台の構築を目指している点で他と

一線を画している。

2. 本書の構成と主な特色

本書は22人の著者による23の論文で構成され、全体は大きく第一部・第二部に分かれている。各部分は“Dancers Talk”と題する編者の概説で始まり、第一部 (Matriarchs, Mentoring and Passing on the Heritage) では女性がどのようにダンスの伝統を伝え、ダンス界の発展に貢献してきたかが検討されている。第二部 (The Physical Body, Theory and Practice and Using the Knowledge) では、身体性・理論と実践・文化的コンテクストという三つの角度から女性ダンサーが抱える心理的・身体的問題が浮き彫りにされる。ダンス関係者だけではなく女性学の教師や生徒、パフォーミング・アーツの歴史や美学に興味がある一般の人 (p. xv) など幅広い読者を念頭において編集されているため、個々の論文 (短い論文は3～4頁) は比較的読みやすい。

主な特色の第一点目は、現在取り上げられることの少ない過去の女性ダンス関係者の業績を発掘している点である。例えば A. パーゼルの論文 “A Portrait of Catherine and Dorothe Littlefield” は、1936年に米国を代表するバレエ団、フィラデルフィア・バレエ・カンパニー (現ペンシルベニア・バレエ) を設立するなど、米国バレエ文化の礎を築いたリトルフィールド一家のキャサリンとドロシー姉妹の活躍に着目している。また本書の特色の第二点目として、論文の分析視角の多様さと研究の対象範囲の広さが挙げられる。*Dancing Female* では、しばしばダンサーのみならず振付家/教師/研究者/舞台ディレクター等、劇場ダンス界に関わる様々な立場の女性が分析の対象になっている。各論文の内容は作品論からダンサーに焦点を絞ったもの、特定のダンススタイルを取り上げたもの、ダンススタイルやジャンルもバレエからフラメンコ、アフリカン・ダンスまで広範囲をカバーしている。またその分析視角は舞踊史、美学、発達心理学等に加え、キャリア研究など社会的なアプローチが試みられているのが、新しい試みとして評価できる。

3. 劇場ダンスとジェンダーに関する研究の方向性

次に、具体的な論文に触れながら *Dancing Female* が提起する、特に重要と思われる三つの研究アプローチについて検討したい。

まず一つ目は、編者フリードラーが論文 “Fire and Ice: Felame Archetypes in American Modern Dance” で示した、女性振付家の作品に表れる女性像に着目する舞踊史分析のアプローチである。

フリードラーは、神話学者 J. キャンベルの女性の原型に関する理論を現代舞踊史分析に応用し、独創的な解釈を行った。キャンベルによると、女性は「調和/不調和」を軸にした六つの神話的原型 (調和型 ①女神 [啓発] ②母/祖先 [身体・精神面での連続性] ③処女/妻 [純潔]、不調和型 ④魔女/悪魔/狂女 [暗闇・精神的脅威] ⑤勇者 [合理的世界] ⑥娼婦 [肉欲的、セクシャルな脅威]) に還元できるという。フリードラーはこの女性の原型理論に基づき、女性の現代舞踊振付作品に表れる女性像の考察を行った。その結果、現代舞踊史は、六つの世代に区分でき、第一世代 (1900-20') から第三世代 (1950-現在) の女性振付家の作品には上記六つの神話的原型が全て表れ、対照的に第四世代 (1960-現在) から第六世代 (70' 後半・80' 初期-現在) の振付け作品に表れる女性像は非神話的であるとされた。

従来のジェンダーの視点による舞踊史では、ジェンダー的呪縛から女性を解放したのは1960年代に登場したポストモダンダンスとされているが、ポストモダンダンスの解放的で肯定的なイメージとは逆に、バレエは身体的・精神的な抑圧の象徴として、しばしば激しい糾弾の対象となる。しかし、例えば舞踊史研究者のS. ベインズは、バレエ反対論者を「女性=被害者」と安易に見なす「アンチバレエフェミニスト」と呼び、行き過ぎたフェミニストのラディカリズムと断ずるなど³、近年こうしたバレエ批判に対する反発も起きている。フリードラーのアプローチは、女性の神話的イメージに基づく分析のため、このような政治的立場や価値判断にとらわれず歴史に迫ることを可能にする。

注目すべき二つ目の研究アプローチは、ダンス界に関わる女性の人間関係を、「mentoring pairs (師弟関係)」という観点から分類する枠組みである。ここでいう「師弟関係」という言葉は、通常の「教師-生徒」関係以上の、より相互に密接な関係性を意味する。編者フリードラーとグレーザーの論文“Dancers Talk about Matriarchs, Mentoring and Passing on the Heritage”によれば、「師弟関係」には大きく分けて「同僚関係 (peer mentors)」と「序列関係 (hierarchical mentoring)」の二つがある。後者の「序列関係」はさらに六つの関係、すなわち①母-娘の関係 (mother-daughter mentoring pairs) ②母-息子の関係 (mother-son mentoring pairs) ③父-娘の関係 (father-daughter mentoring pairs) ④錯綜した関係 (enmeshed mentoring pairs) ⑤人生を通しての師 (life mentors) ⑥象徴的な師 (symbolic mentors) に細分化される。①はモダンダンスの世界に最も多い、振付家が女性でそのダンサーやそのスタイルの伝承者が女性である場合、②は振付家や組織の創始者が女性で伝承者が男性である場合、③は古典バレエの世界で見られる、組織のトップや振付家が父として権威をもつ場合、④は組織やスタイルを継承しながら、批判的でもあるというより複雑な関係性を指し、⑤は生涯に影響を及ぼすような師 (例えばルドルフ・ラバン理論の後継者として世界中に弟子をもつ A.H. ゲストのような場合)、⑥は精神的な指導者 (この場合直接の関わりあいがなくても良い。例としては全てのモダンダンサーの母でもあるイサドラ・ダンカンなど) を意味する。これに対し「同僚関係 (peer mentors)」は、平等の立場における「教え-教えられる」という関係性に着眼したもので、「序列関係」が目立つダンス界において「同僚関係」が大きな力となってきた事を明確化し、大変興味深い (本の中では peer mentoring pairs の例として、フリードラーとグレーザー二人の写真が載っている)。このような人間関係の分類は、特定の振付家/ダンサー/ディレクター/研究者などの個人研究に役立つばかりでなく、近年活発化しつつあるアート・マネジメント研究など、組織の人間関係掌握を重視する研究にも寄与するところが大きいと思われる。

本書において着目すべき三番目の研究アプローチは、「キャリア」という視点による女性ダンサー/振付家の研究である。本書の第二部では女性のダンスキャリア追求の過程における女性の内面的葛藤を考察した論文を集めている。S. A. リーは“Women's Lives in Dance: A Developmental Perspective”において、成人発達理論に基づき女性ダンサー/振付家へのインタビューと200を越える調査で得られたデータを分析し、出産やダンス界における立場などの私的・公的生活両面での変化により、女性ダンサー/振付家が特に30代に大きな心理的危機に直面することを明らかにしている。西洋ダンス界では若く・か弱くて繊細な身体イメージを良しとする価値観が浸透しており、そしてこの価値観が、体型や年齢が理想と異なるというだけで多くの才能ある女性たちのキャリアを阻害する要因になってきた。同様の現象は、洋舞が文化として根付いている日本のダンス界にも見られる。困難を抱える現場の女性を救う為には、詳細な調査による実状把握が緊急の課題であり、その意味で本書は重要な一歩を踏み出して

いる。

最後に本書の問題をあえて挙げるとすれば、幅広い研究対象をカバーしているため、論文の中には十分な掘り下げが足りないものがある点だろう。しかし「ダンスとジェンダー」に関する多岐に渡る分析枠組み、論点、課題を学べる利点を考えると、本書はその問題を補って余りある魅力を備えている。女性に関する多彩な知見がちりばめられている *Dancing Female* は、「ダンスとジェンダー」という研究分野に深い寄与をもたらすものであり、この分野に興味をもつ全ての人に薦めたい一冊である。

(さこう・はるこ／お茶の水女子大学人間文化研究所研究員、ジェンダー研究センター教務補佐員)

注

1. バレエ、モダンダンスを代表とする西欧で発達した上演型舞踊を指す。
2. F. E. フリードラーと G. B. グレーザーはこの ADF 会議について本書の中であまり触れていない。会議の内容は、*Dance Research Journal* 誌に詳しい報告が載っている。Rosen, Bernice M. Reports on the American Dance Guild Conference, Philadelphia, 16–18 June 1989. *Dance Research Journal* 21. 2 (Fall 1989): 51–52.
3. Banes, Sally. *Dancing Women: Female Bodies on Stage*. New York: Routledge, 1998.